

一 次の文章を読んで後の問に答えよ。

お茶の方に「一期一会」という言葉がある。始め禅宗の言葉かと思つたが、どうも禅籍には見当らぬ。しかし茶人の言葉としてはよほど、禅経験のある人が言い始めたことに違いない。あるいは紹鷗の言葉だともいう。「和敬静寂」の四字も有名だが、私はこの「一期一会」の方が一段と特色ある言葉のように思われてならぬ。「一期は一生涯のことで、「一会」は一度出会うという意味であるが、茶を「一生一度の茶」として点てるといふように平たく言い直してもよい。もっともここにいう「一」は多に対する一とか、二になる一とかいう意味の一ではない。ここが一寸むずかしい所であるが、繰返す一ではなく、一それ自らの一なのである。吉兵衛という妙好人の言葉を借りると、「為始めて為納め」つまり「為直しのないことなのである。①茶を点てるのは、そういう行いでなければならぬというのである。そうすると何度茶を点てようが、いつどこで茶を点てようが、まったくな想いの茶になる。反復などということは消えてしまう。一度一度で完了している。だから「倦怠」ということがない。前に出した言葉を用いると、茶を縦に点てるといふことになる。私は蒐集もまたそうでありたいと考えるのである。②浜田は先日「柳が物を持つと、どんな骨董でも、立ち所に骨董でなくなり、まったくなものになる。これが不思議だ」と言ってくれたが、実は不思議なのではなく、「このもの」を「即今」に持つと、自然にそうなるてしまうのである。③誰にだつてそうならねばならぬ筈である。だからどんな古い物でも、新しい受取り方に接すれば、新しい物に甦ってくるのである。この受取り方を「即今の受取り方」と呼んでもよい。物に新旧はあるが、新旧のない受取り方に接すれば、「いつも今」の品に成り変わるのである。

ではどう受取れば、そうなるのか。多くの蒐集家が物を買うのを見てみると、概念で判じて物を買っている場合がとても多い。自分の知恵を持ち出したり、世間の評判に「イ存したり、銘や箱書に便つたりして、いつもある物指で計り、これで割り切れると安心して買うのである。この心理を心得ているから、骨董商は雄弁に故事来歴を述べたり、何々図録に「入っているなどと安心させる。逆に買い手の方で知識が出来て巧者になると、物を買う時その知識をいつも振回すことになる。このほか「古い」とか「珍しい」とか「疵がない」とか、色々の価値基準を持ち出して、それに「デキ合すれば」「これはよい」と安心する。しかし本当に美しい物は、そんな物指で割り切れるものではない。知ることが直ちに知ることだと思ふのはおかしい。見る前に知を働かすと、見る眼が知に妨げられると気付かないのであろうか。

私とてある知識を持つているから、必然に幾許かの知恵が潜在的にも働くだらうが、そういう知識の闕入が目立つと、物を見る眼はどうしても濁ってくる。一般の人は知識でもないと、物が正しく見えぬように考えるが、それは反対なのだ。知識で計ると知識で計れる以内のことより見えないものだ。つまり色眼鏡のようなもので、その色以外の色は見届けるすがない。知識を持つことそれ自身は一向に差支えないが、④その奴隷になると、物は見えなくなる。見て後に知る習慣をつけるのが肝心で、それが前後すると、美しさは匿されてしまう。

物を見るのは無手に限る。心を裸にするとよい。知恵の着物を着たり、七つ道具を持ち出したりする必要はない。昔、道元禅師が支那から帰つて来た時、「空手にして郷に還る。ゆえに一毫も仏法なし」と言つたというが、大した説法をしたものである。この「空手還郷」「無仏法」が、真に仏法への体得であり、把握であるのだ。こちらが素裸だと、物の方でも匿すものがなくなる。⑤仏法でよく「捨てよ」というが、これのみが「得る」所以である。つまり物を見る時、物と自分との間に介在物を置かないことである。じかに見届けことが肝要なのだ。それでないと物の中には入りこめぬ。禅宗では、「直下」という言葉をよく使うが、全く直下に見さえすればよい。知恵や評判を持ち出すなら直下ではない。知識は物を離れて見るといふ働きに過ぎぬ。

私はある名門の人で立派な品を沢山所持している人を知っているが、その人は有名になつてゐるものでなくば買わないのだ。だからその蒐集には佳い品があるのは必定だが、しかし自身で見届けての上ではない。ムシろ評判の高くないようなものは買えないのだ。買う眼がないのだ。だから買い方には創作はないし開拓もない。持ち方にも自主的なところがないせいか、物も輝いては来ぬ。その人の蔵品が陳列してある室に入つたことがあるが、さむざむしていた。見方に生き活きたところがないので、物の方も生命を示そうとしない。物の良し悪しもさることながら、買い方、持ち方で、物は生きたり死んだりする。蒐集には自主的な自由な活きた眼が何よりほしい。ここで活きた眼とはじかに物そのものを見る眼力を指すのである。評判や市価や、そんなものに便らぬ自由さが欲しい。

柳宗悦「蒐集物語」による

注 紹鷗 武野紹鷗。戦国時代の堺の豪商で茶人。千利休の師とも言われる。

妙好人 浄土真宗の信心の篤い人。

浜田 浜田庄司。陶芸家で筆者とともに民芸運動をした人。

銘 茶器などにつける固有名。

箱書 道具の銘や由来や歴代所有者などを道具を入れた箱に書いたもの。

支那 戦前・戦時中の中国の呼称。

問一 傍線部a～dのカタカナ部分の漢字を使った熟語として最も適当なものをそれぞれ次の①～④の中から選んで番号で答えよ。

解答番号 a 1 b 2 c 3 d 4

- | | | | | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| a イ | ① 委嘱 | ② 依頼 | ③ 異色 | ④ 移植 | b ノ | ① 野合 | ② 乗車 | ③ 濃淡 | ④ 掲載 |
| c テキ | ① 摘果 | ② 敵対 | ③ 適切 | ④ 一滴 | d ムシ | ① 丁寧 | ② 懇切 | ③ 比喩 | ④ 陶醉 |

問二 傍線部ア、イの意味として最も適当なものをそれぞれ次の①～④の中から選んで番号で答えよ。

解答番号 ア 5 イ 6

- | | | | | |
|------|------------|-----------|-----------|-------------|
| ア 倦怠 | ① 飽きること | ② 甘えること | ③ 怠けること | ④ 緊張すること |
| イ 雄弁 | ① もったいぶること | ② 強気であること | ③ 下手に出ること | ④ 言葉巧みであること |

問三 傍線部①「茶を点てるのは、そういう行いでなければならぬ」の内容説明として最も適当なものを次の①～④の中から選んで番号で答えよ。

解答番号 7

- ① お茶を通じて旧交を暖めあうことが容易になるような、緊張感のないまっさらな思いでお茶を点てる。
- ② それがお茶の仕始めで仕納めのように、絶対に作法に誤りがないように完璧に修練を重ねてお茶を点てる。
- ③ 客が自分が大切に扱われていることを自覚できるように、お茶の作法が一度で完結するようにお茶を点てる。
- ④ 生に一度だけ出会う客に接するような、緊張感を抱き、新鮮な心で大切にもてなす気持ちでお茶を点てる。

問四 傍線部②「誰にだってそうならねばならぬ筈である」の内容説明として最も適当なものを次の①～④の中から選んで番号で答えよ。

解答番号 8

- ① 誰が持っている骨董品でも埃や汚れを取り除くと新品のように輝き始め新しい価値が付加される筈である。
- ② 誰が骨董品を所持しても、その道具が身の回りの生活用具としてよみがえり生き生きと輝くべきである。
- ③ その道具の本来の用途を知らない人にとっては、誰にでも意味の分からない新鮮な物に見える筈である。
- ④ 誰それが所持したといういわれが骨董品に付くと、それが骨董の付加価値となつて高値になるに違いない。

問五 傍線部③「その奴隷になると、物は見えなくなる」の内容説明として最も適当なものを次の①～④の中から選んで番号で答えよ。

解答番号 9

- ① 骨董に関する世間の評判ばかりを気にしていると自分の知恵を持ち出せず、主體的な判断もできなくなり、偽物をつかまされる。
- ② 骨董に関する正しい知識がないと骨董商からだまされそうな気がして疑い深くなり、骨董が正しく評価できないと考える。
- ③ 骨董を知識で判断すると知識で考える範囲以外のこととは分からないから感性とか直感という曖昧なもののみはますます当てにならない。
- ④ 骨董に関する故事来歴などの知識や価格などが骨董の価値だと考えると、骨董の本当の美しさを感じることができない。

問六 傍線部④「仏法でよく『捨てよ』というが、これのみが『得る』所以である」と同じ論法で表現されていることわざとして最も適当なものを次の①～④の中から選んで番号で答えよ。

解答番号 10

- ① 急がば回れ
- ② 馬の耳に念仏
- ③ 立て板に水
- ④ 棚からぼた餅

二 次の文章を読んで後の問に答えよ

さて日本には、いわゆる日本の近代化と一口でいわれる事実の中に、個人の独立という行為は ^a フクまれていることを指摘してきました。家というものがあって、また国というものがあって、その中に日本人はがんじがらめになって、人間がほんとうの自分の自己というものを、見いだすことのできない、あるいは見いだしても、それを十分に発展させることができない、状況にあったということです。すなわち人間が自分を主体として、第一人称として、自分の世界を述べ、それを背負って行くことが、いかに困難であるかということです。

ところで、この一人称、「A」「私」という形で自覚される、この自分というものが、ほんとうの意味で独立の責任主体として、また独立人格の、あるいは理想的主体として発 ^b ゲンされないのみならず、それを実現することが困難であるということの中には、重大なことが含まれています。日本人においては人間の一人一人が、つまり他人と区別された自分として、充分に独立的に、独立的な主体として自覚されないということがあります。他人と自分との間の区別が、はつきりしていないということです。 ^①つまり、他人がいつまでたっても、私にとって「あなた」である。そこまではいいのですけれども、 ^②今度は、その「私」は「あなた」に対してのみ「私」なのです。

「B」 私たちが、なにか決めようとする場合、たとえば自分が子供の親であるということから、決めなくてはならなくなるのです。事実まわりからもそう要求されます。あるいは戦前であれば天皇の臣民として、なにか決めなくてはいけなくなります。そのようなときに、天皇なり子供なり親なりに対して、まさに ^② 私たちが第二人称になっているのです。天皇や親や、あるいは仕事上の上役や先輩から「お前」とか「君」とか「あなた」とか言われる人間として、自分を自覚しているのです。

あるいは一家の中にあつて、子供から親として考えられ、妻君から夫として考えられ、つまりすべて他の人から二人称として考えられているのです。だからその相手の意志を、相手の考えを推しはかってみなければ、自分の行動を決定することができないのです。また相手も同時に、自分にとって二人称になっているのです。相手が私の先生である場合、先生と私との関係は、単に一人称と二人称の関係ではなくて、両方ともお互いに、相手に対して二人称になってしまっているのです。 ^③ 良い悪いは別として、 ^④ 日本文化の一つの重要な問題として、そのような関係が非常に強く残されています。

真の責任主体としての自分、あるいは ^④ 解放された個人としての自分というものが、すなわち一人称というものがほんとうに成立するためには、同時にその人は他に向かつては、三人称でなければなりません。

自分にとっては一人称であるけれども、他に対しては自分が三人称になっていなければなりません。たとえば学校の先生からは、私は生徒の中の一人として見られており、先生とは、試験というものを通してだけ接触する。試験というのは、これは客観的な場所ですから、私が先生からいかに愛されていても、先生はそのゆえに私にいい点をつけることはできません。試験をすれば、よくできる生徒がいて、その生徒を先生がきらいであったとしても、その生徒に悪い点をつけることはできません。そういう中におかれたときに私は、はじめて先生の絆から離れて、 ^⑤ 自由になるということができるといえます。

「C」 こういう例があります。日本でよく学閥ということを行います。大学の閥です。派閥、たとえば京都大学の先生は、全部京都大学の卒業生がなるといえることがあり、東京大学からは、なかなか京都大学には入りこめない、また京都大学からもなかなか東京大学に入り込めない。東京大学の先生は、東京大学の自分が教えた生徒の中で、自分がいちばんいいと思う人を自分のあとにすえる。これは必ずしも学問的にいちばんよくなくても、自分はこの人が将来いいと思う人を、つまり自分が気に入った人を、自分のあとにすえる行き方です。 ^⑥ 「D」 フランスですと、これはなにもフランスをはめるわけではないし、フランスもたくさん悪いところがあり、非常にしゃくにさわれるところがありますけれども、こと選抜や任命ということになると、ちがいます。たとえばフランスでは、大学の先生を選ぶときには、一つポストにあきができますと、 ^c カン報で公告するので、そうすると欲する人は、 ^d だれでもそれに願書を出すことができます。その願書を選考委員会が選び、場合によつては試験を設けて、その ^e コウ補者の中でもっとも優秀だった人が、ポストにつきます。だからこの誰がどこへ突然現われるか、全然わからないわけです。

こういうときにすべての人が、 ^⑥ 同じ第三人称として扱われているといえます。特にある人だけが選考委員会に対して、第二人称となることができないからです。そうしてはじめて、今度は第三人称として扱われた人の内

面に、その人のほんとうの自由、すなわち相手から束縛されないで、自分の能力だけによって、自分の道を開いていくことができる自由が、約束されるのです。

すなわち自分の中に自分が、ほんとうに自分のものとして持っている才能とか、天分とかが純然と現わせる、すなわち第一人称として、自分を発揮することができるのです。その場合には、社会全体が第三人称の集まりである社会になっていなくてはいけません。その典型的な現われは、法律です。法の前にはすべての人が平等です。つまり法律は、社会の人間が全部三人称であることを、前提としてできているわけです。だから悪いことをすれば、それが校長の息子であろうと、総理大臣の息子であろうと、つかまるわけです。逆に、いいことをすれば、けつして他人はその人をおとし入れることができません。

森有正「いかに生きるか」による

問一 傍線部 a～d のカタカナの部分に改めた文字を使った熟語として適当なものをそれぞれ次の①～④の中から選んで記号で答えよ。

- | | | | | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| a フク | ① 恰幅 | ② 裕福 | ③ 帰服 | ④ 含羞 | b ゲン | ① 威厳 | ② 権限 | ③ 具現 | ④ 起源 |
| c カン | ① 官憲 | ② 完璧 | ③ 勧進 | ④ 監修 | d コウ | ① 諸侯 | ② 氣候 | ③ 好悪 | ④ 講堂 |
- 解答番号 a 11 b 12 c 13 d 14

問二 「A～D の中に入る語を次の①～④から選んで番号で答えよ。ただし、記号は一回ずつ使うこと。

- ① たとえば ② ところが ③ すなわち ④ だから

解答番号 A 15 B 16 C 17 D 18

問三 傍線部①「今度は、その『私』は『あなた』に対してのみ『私』なのです」を説明する例として最も適当なものを次の①～④の中から選んで記号で答えよ。

- ① 幼児にとつての母親は自分のためだけの母親であつて、自分以外の人と母親との関係を空想できない。
② 友人や家族との直接的な会話が少なくなり、電子メールなどを媒介として意思のやりとりをする。
③ 現代の通信機器の発達により、家族との関係が他人との関係のように等距離の冷めた関係になる。
④ 集団で生活することが得意な日本人は、集団の和を最も重要視し、自他の区別は邪魔にさえなる。

解答番号 19

問四 傍線部②「私たちが第二人称になっている」の説明として最も適当なものを次の①～④の中から選んで記号で答えよ。

解答番号 20

- ① 自分の意志や意見がいつも相手の意見を追認していて自分の考えがない。
② 自分の意志や意見が、常に他者との関係を基準にして成立し、表現される。
③ 「お前」や「君」や「あなた」などと呼ばれる親しい関係になっている。
④ 父親が家族から家長として権威や威厳を保つことを常に要求されている。

問五 傍線部③「日本文化の一つの重要な問題として、そのような関係が非常に強く残されています」とあるが、「そのような関係」の例としては合致しないものを次の①～④の中から選んで記号で答えよ。

解答番号 21

- ① 相撲の親方が自分の弟子の暴力について、警察・裁判所などの処分に委ねる。
② 自分の親友の経営する会社だからといって、大臣がその会社に特別に便宜を図る。
③ 選挙で、自分の父が支持している人物だからという理由で自分も支持する。
④ 落語の師匠が自分の弟子の生活の面倒を見たり、叱ったり、稽古をつけたりする。

問六 傍線部④「解放された個人」、⑤「自由になる」とあるが、何からの「解放」であり、「自由」であるか。次の①～④から選んで番号で答えよ。

解答番号 22

- ① 封建的な制度による差別や抑圧のために、強いられ続けてきた貧困からの解放・自由。
② 本人が意識していない、社会全体を広く支配している法律や規範からの解放・自由。
③ 疑問に思ったり、不本意に従ったりしている古い価値観やしきたりからの解放・自由。
④ 本人の精神的な独立や考え方の客観性を阻害している様々な条件からの解放・自由。

問七 傍線部⑥「同じ第三人称として扱われている」の内容説明として最も適当なものを次の①～④の中から選んで記号で答えよ。

解答番号 23

- ① 公平な機会を与えたように見せて恣意的に選ぶということ。
- ② 「彼・彼女」という人称代名詞の根元が分かるということ。
- ③ 一個人の資質・能力が公平で客観的に評価されるということ。
- ④ 選考委員は初めから誰かに恣意的に選任されているということ。

三 次の a～e の熟語の類義語として適当なものを後の語群①～⑨からそれぞれ選んで記号で答えよ。

解答番号 a 24 b 25 c 26 d 27 e 28

a 暗示 b 賢明 c 排斥 d 了承 e 適切

〔語群〕

- ① 適材 ② 告示 ③ 利発 ④ 愚鈍 ⑤ 妥当 ⑥ 免除 ⑦ 納得 ⑧ 疎外 ⑨ 示唆

四 次の a～h の慣用句の意味として適当なものをそれぞれ次の①～④の中から選んで記号で答えよ。

解答番号 a 29 b 30 c 31 d 32 e 33 f 34 g 35 h 36

a 後ろ指を指される

- ① 陰で悪口を言われる。
- ② 知らない人からも支持される。
- ③ 名指しで非難される。
- ④ 後から来た人に席を譲る。

b 曰く言い難い

- ① 話すより書く方が難しい。
- ② 立場上、詳しいことを言えない。
- ③ 言葉では表しにくい内容や性質。
- ④ 絶対に隠しておきたい秘密。

c 高をくくる

- ① 地位の高さを競い合う。
- ② 相手を見くびる。
- ③ 相手の誇りを傷つける。
- ④ プライドの高さが欠点となる。

d 面の皮が厚い

- ① 精神的立ち直りが早い。
- ② 肝が据わっている。
- ③ 正々堂々としている。
- ④ 恥知らずで図々しい。

e 薄氷を踏む

- ① 春の到来を待つ
- ② 冷たい人間関係を知る。
- ③ 用心をして物事に対処する。
- ④ 非常に危険な状況に身を置く。

f 目くじらを立てる

- ① 些細なことをとりたててとがめる。
- ② 危険でも勇敢に進んでいく。
- ③ 将来の大きな夢を抱く。
- ④ 当面の目標を定める。

g 木で鼻をくくる

- ① うっかり忘れたふりをする。
- ② とても痛い目に遭う
- ③ ひどく冷淡な様子。
- ④ 似てもつかない肉親。

h 烏合の衆

- ① 芸術的高みを目指す目的集団。
- ② 主義主張の相容れない人々。
- ③ 大変能力の高い人々の集まり。
- ④ 統一も規律もない寄せ集めの人々。

五 次の各文の空欄 (A)～(F) にそれぞれ適語を入れて慣用句を用いた文を完成させよ。適語は後の語群

①～⑨から選んで番号で答えよ。

解答番号 A 37 B 38 C 39 D 40 E 41 F 42

- アあまりにも怠けた勤務態度に社長が業を (A)
- イ失業中に仕事を紹介してもらい食指を (B)
- ウ車軸を (C) ような雨が降る。
- エ優勝するために寸暇を (D) 練習をした。
- オくどくどと御託を (E) だけで仕事はしない。
- カ恩師の衣鉢を (F)

〔語群〕

- ① 継ぐ ② 動かす ③ 下す ④ 惜しむ ⑤ 並べる ⑥ 煮やす ⑦ かぶる ⑧ 折る ⑨ 告げる

〔六〕 次の a ～ g の () に適当な漢字を補って四字熟語を完成させよ。漢字は後の語群①～⑨から選んで番号で答えよ。

- | | | | |
|------------|---|-----------|------------|
| a 日 () 月歩 | b 権謀術 () | c () 私混同 | d 巧 () 令色 |
| e 起死 () 生 | f 因果 () 報 | g 温故知 () | |
| 〔語群〕 | ① 新 ② 公 ③ 数 ④ 言 ⑤ 退 ⑥ 朗 ⑦ 進 ⑧ 回 ⑨ 応 | | |

〔七〕 次の夏目漱石についての文章の空欄 A ～ F に当てはまる語句を後の①～⑨から選び、番号で答えよ。

解答番号 A [50] B [51] C [52] D [53] E [54] F [55]

明治三十八年（一九〇五年）、夏目漱石は俳句雑誌（「A」）に発表した最初の小説（「B」）が大評判をとり、以後続編を次々と発表していった。さらに（「C」）『草枕』『二百十日』『野分』を書き旺盛な創作力を示した。この時期の作品には、人生を余裕をもって眺めようとする傾向「低回趣味」が強く、しやれたユーモアや美的世界に遊ぼうとする姿勢は（「D」）と呼ばれ、当時主流の自然主義に対抗するこ
とになった。

新聞社に入社し、専属作家としての第一作（「E」）以後、『坑夫』『夢十夜』『三四郎』を経て、『それから』以後の漱石は、初期の作風からしだいに実存的関心を深め、エゴイズムの問題を中心主題とするようになる。続いて発表した（「F」）は、『三四郎』・『それから』とともに（三部作）と呼ばれる。

「修善寺の大患」後、漱石の言う「則天去私」の心境を経て、『彼岸過迄』『行人』『こころ』『道草』と我執を追究する作品を発表し続けたが、『明暗』を執筆中、大正五年十二月に死去した。

- | | | | |
|--------|---------|-----------|--------|
| ① 門 | ② 坊つちゃん | ③ 吾輩は猫である | ④ 浪漫派 |
| ⑤ 虞美人草 | ⑥ ホトトギス | ⑦ 野菊の墓 | ⑧ 余裕派 |
| | | | ⑨ 阿部一族 |